

太古山日長堂ってお寺さんですか？

泰平橋手前の主要地方道 新潟・新発田・村上線（旧国道7号線）に面した北側に太古山日長堂があります。もともと「新崎7軒衆」のひとりで名主も務めた古山家の邸宅です。

木造平屋建ての主屋「日長堂」は宝暦年間（1751～64）に建てられました。主屋とつながる仏蔵「開山堂」は19世紀に建てられ、当時の豪農の仏堂の形を伝えています。いずれも2000（平成12）年、国の登録有形文化財となりました。また、邸内の築山の庭園は「太古山」と呼ばれています。

この「太古山日長堂」の名称は、中国の宋の時代の詩人、唐庚が読んだ「醉眠」という漢詩の「山静似太古 日長如小年」という一節によります。「山は静かで、まるで太古のようだ。1日は長くて、1年にも感じられる」という意味です。

また、1878（明治11）年の明治天皇の北陸巡幸のときには、小休所として利用されました。1885（明治18）年に古山

家の12代当主となった古山文靜は、行幸地の史跡としての整備を積極的に行いました。新崎の創立を記した「新崎邸碑」をはじめ、様々な名士、偉人と交流し、その事績や筆跡を刻んだ石碑などを「太古山」にたくさん建てました。

この太古山日長堂のとなりに、門樋の生き地藏」と呼ばれる地藏様を安置しているお堂があります。この地藏様は台座に「明和2年（1765年）3月」と彫られていて、大変古い地藏様です。240年以上、地域の人々から厚く信仰されています。

MEMO

新崎7軒衆

新崎開発の祖を新崎7軒衆といえます。戦国時代の天文年間（1532～1554）に信濃国（長野県）から移住してきました。古山家をリーダーに佐藤・伊藤・高橋・井上・土田・豊崎の7家が田畑を開発して村を形成したと伝えられます。子孫は今でも新崎で暮らしています。



■ 松浜地区（松浜上・下）と渡し舟

松浜橋の完成まで、下山地区との往来、飛行場（下山）や臨港埠頭（山の下）へ働きにいくためなどに、渡し船を利用しました。

橋がかかるまでに、2度、船の転覆事故がありました。1度目は1939（昭和14）年の11月1日で、下の渡し場から出航した機械船が転覆して、60人中30人が死亡しました。2度目は、橋を工事中の1942（昭和17）年11月29日、上の渡し場から出航した小型モーター船が転覆し、53人中32人が亡くなりました。

2度の事故はともに、悪天候であったところに、定員を超える乗客が船に乗ったことが原因でした。1度目の事故の後、橋をかけることが決められたものの、経費の都合で工事は中断していました。しかし、2度目の事故で、工事は急がれ、1943（昭和18）年7月に木製の橋が完成し「松浜橋」と名付けられました。その後、洪水や新潟地震で橋が流されることもありましたが、1964（昭和39）年12月に現在の橋がかけられました。



現在の松浜橋

コラム

舟を並べて阿賀野川に橋をかけた！ ～明治天皇の北陸巡幸～

橋がなく、人々がまだ舟で往来をしていたころ、明治天皇が阿賀野川の橋を渡りました。

このころ、天皇は国民生活のようすを知ることや、新政府の政策を広く行き渡らせることなどを目的に、全国各地を巡幸していました。新潟県をはじめ北陸地方や東海地方の視察も行われました。

現在の新潟市域には、1878（明治11）年9月16～21日に滞在しました。北区を通られたのは9月19日で、天皇は新潟から新発田まで新発田街道を通って移動されました。

橋がなかった阿賀野川には、天皇が川を渡るために、特別に橋がかけられました。その橋は、舟を横に95隻並べ、その上に厚板を縦に渡して造られたものです。天皇は、その舟橋を板輿（いたこし）に乗って渡られたあと、新崎の古山家（太古山日長堂）で休憩、内島見の近藤家（内島見行在所跡）で昼食をとられ、新発田へ向かわれました。



舟橋の想像図